

支援者のウェルビーイングを高める対話プログラム～児童養護施設職員を対象とした写真を用いた対話の試み～

研究員 楠 聖伸



児童養護施設は、保護者のいない児童や虐待などの理由で家庭生活が困難な児童が生活する福祉施設です。国内には 621 の施設があり、約 2.3 万人の児童が生活しています。入所児童の多くは、虐待など逆境的体験を有する子どもで、施設職員は、子どもたちの日常生活の支援や情緒的なケアを 24 時間 365 日、継続的に担う専門職です。しかし、子どもの抱える課題の複雑さや支援の困難さから、施設職員自身が心理的負担を抱えやすく、自身の仕事の意義や価値を実感しにくい状況にあることが指摘されています。こうした背景から、本研究では、支援者のウェルビーイングに着目し、児童養護施設職員の自己有用感や主観的ウェルビーイングを高める方法の開発に取り組んでいます。

生活の支援や情緒的なケアを 24 時間 365 日、継続的に担う専門職です。しかし、子どもの抱える課題の複雑さや支援の困難さから、施設職員自身が心理的負担を抱えやすく、自身の仕事の意義や価値を実感しにくい状況にあることが指摘されています。こうした背景から、本研究では、支援者のウェルビーイングに着目し、児童養護施設職員の自己有用感や主観的ウェルビーイングを高める方法の開発に取り組んでいます。

本研究では、入所児童の写真を用いた対話プログラムを開発しました。このプログラムでは、施設職員が子どもの日常の様子や変化がわかる写真を手がかりとして、子どもとの関わりや関係性、そして日々の取り組みについて対話しながら現在までのケア実践を振り返ります。とくに写真を媒介とすることで、日常の出来事を具体的に思い出しながら、自身の支援実践を言葉にすることができる点が特徴です。これまで 15 カ所の児童養護施設職員 30 名に協力いただき、プログラムの効果を検証しました。本研究では、対話プログラムを実施したグループ（介入群）と、自己完結型の振り返りワークを行ったグループ（対象群）を比較し、自己有用感や主観的ウェルビーイングに関する心理指標を用いたアンケート調査を実施しました。その結果、対話プログラムを実施した施設職員において、自己有用感の向上やネガティブ感情の低下などが確認されました。また、対話プログラムでは、施設職員が「正解がわからない」状況の中で、試行錯誤を重ねながら子どもと関わり、その経験を後から意味づけし直すことで、自身の実践の価値を再認識していく過程が語られました。写真を手がかりに日常の実践を振り返り、対話を通してその意味を言葉にすることが、支援者自身の自己有用感を支える重要なプロセスである可能性が示されました。

児童養護施設においては、子どもへの支援が重視される一方で、支援者自身を支える取り組みはまだ十分とは言えません。本研究は日常の支援実践を振り返る対話の機会を通して、支援者のウェルビーイングを高める方法を具体的なプログラムとして提示する試みです。今後は研究をさらに発展させ、児童養護施設だけでなく、介護・看護や他の福祉分野など対人援助職への応用も検討していきたいと考えています。